

の
会
美紗

たより

夢か現のアジール公演

西松 布咏

三月十一日午後二時四十五分。

京都「アジール公演」で唄う稽古を終え、三陸沖の地震速報をテレビ画面で観ながら遅い昼食をとっていた。その時、突然画面が揺れ大きく横揺れが始まった。とつさにテーブルの下に隠れ、頭上で激しくものが壊れる恐怖に懼きながら、私はいつたいどこへ避難したら良いのだろう…と途方にくれていた。

アジールとは耳慣れぬ言葉だがASYLUMの略語で、隠れ家や避難所を意味する英語である。あれから一週間後、私は京都に旅立った。まさに毎日揺れる東京から避難するよう、「アジール公演」のために…

京都の空気は真冬のように冷たかつたが、穏やかな瀬川沿いの木屋町にひっそりと佇む畠旅館の座敷に通された時は、ようやく安穏の地にたどり着いたような気持ちであった。

いよいよ初音館でのデモンストレーション公演を夜に控えた二十五日の朝、私は座敷の雪見障子を開け放ち、鴨川のゆつたりとした流れを見ながら三昧線を弾いた。

苦界に身を任せながらも憂き世に流されまいと必死で生きてゆく遊女の唄「嘘とまことの二瀬川」騙されぬ氣でだまされて…」をつぶやきながら一瞬にしてすべてを奪つてしまつたあの大津波の画面を思い出した。

岡倉天心が瞑想した茨城の五浦海岸に建つ六角堂が跡形もなく消えてしまったことも…十数年前にその座敷で親しい友人達と大海原を眺めながら句作に興じたことも今では遠い幻の夢となってしまった。

眼前的鴨川は朝日を浴びてきらきらと輝き、悠久の時を

ゆつたりと経て何事もなかつたかのように流れている。どうぞこの景色はいつまでも変わりませぬように…と祈る思いで唄い続けた。

京都を離れる日、蕾の固い桜が震えている八坂神社で手を合わせ、円山公園を散策し、柔らかな日差しに誘われて、ねねの道、石塀小路へと足の向くまま歩き続けた。そろそろ…どこにいるのかわからなくなつた時、摩利支天・禪居庵と書かれた境内が突然眼前に飛び込んで来た。

今回の公演に唄つたケネス・レクスロス作詞「摩利支子の唄」の神様がここにも奉られている!と思わず興奮した。夜毎あなたを夢見るので恋しい昼は夢なのです。と京都に滞在した詩人ケネスは摩利支子という芸者に名を借りて詠んだ。

摩利支天の語源はサンスクリット語で陽炎を意味し天災地変の守護神で、やがては武士のお守りとなる七頭の猪に座す開運と勝利の神になってゆく。かたやその語源はインドの川の流れを意味し、水を守る神様でもあり琵琶湖の竹生島や湘南の江ノ島に「妙音弁財天」として芸能の神としても崇められている。

三月十一日を境に神々のおわします神話の国は、瞬時に生活のすべてを破壊する天災に見舞われ、人智の遠く及ばない無常の国へと塗り替えられてしまった。

昔から先人はそれを畏敬していたからこそ神仏に祈り、神への鎮魂を捧げるために歌舞音曲が生まれ、様々にかたちを変えて今日まで人々と持続してきたのだ。その伝統音楽を未来へつなげたいと日々研鑽を積んでいたはずの自分が、日本列島がいとも儂く破壊してゆく様を果然と見ていくことしか出来なかつた。

今まで私は何をしてきたのだろう。これから何が出来るのだろう。

いまだに余震が続き、自問自答の落ち着かぬ日々に苛立ち、いつそどこかへといった衝動に駆られることがあつたが、京都から戻つた今、お弟子さんと共に白金台の稽古場に正座できることがかけがえのない日常と思えるようになつた。

繊細な糸の響きに耳を澄ませ、先祖の望憶の声に耳を澄ませ、今こそ日本の心に耳を澄ませ新たな日本の唄を高らかに紡いでゆこう。

選曲 II 編集

高橋 幸治

かくも儂い国に生まれた縁に感謝し、山花草木の美しい風土に育まれてきた音楽を命ある限り唄いつづけてゆこう。京都での「アジール公演」は私の唄に対する覚悟を決める旅の始まりとなつたような気がする。



撮影 清水俊洋

情報をどんな順番で並べるか？三、その並び順を採用した場合、全体としてどんなメッセージが生成されるのか？

二十世紀初頭から中頃にかけて「戦艦ポチョムキン」などの名作を撮った旧ソ連の映画監督セルゲイ・エイゼンシユテインの「モンタージュ理論」は、まさにその「情報の並べ方」に関する編集の理論で、エイゼンシユテインの主張を「く一樣に撮り揃んで言うと、シーンAの次にシーンBを繋げた場合、ABそれぞれの意味が止揚されCという上位の意味が発生する……」というものである。

編集＝情報デザインにとってことほどさように順番は大切で、内包している個々の情報は同じでも、その順番を変えれば印象、意味、さらには全体の内容までが変わってくる。で、「ここからが本題。早いもので入門以来丸々四年が経ち、以降、師匠の演奏を何度も拝見させていたいたが、毎度毎度はつとさせられるのは、舞台ごとに異なる師匠の選曲の妙である。特に一曲目。何かこう、さりげなく、自然に、かつ強引に、ふつと気持ちを持つていかれる。最初の曲といふのは演奏が始まる直前までその場を覆っていた雰囲気をどう異化するかが問われるわけで、その空気をここまで引き継ぐのか、またはどこから断ち切るのか、おそらく、最も重要な判断なのではないだろうか？

一月二十九日（土）浅草・ことぶ季亭で催された落語の春風亭正朝さん、地唄舞の吉村ゆかりさんとの共演「江戸夕儂嘶」でも、やはり師匠の選曲は冴えていた。この日の会場はマンションの一室を改造し（たぶん）舞台をしつらえたもので、それなりの風情はあるものの若干手狭。「ごくごく気持ちが落ち着かない。そこに正朝さんの軽妙な司会が入り、いよいよ師匠の出番となつた訳だが、「並木駒形花川戸・山谷掘からちよいと上がり」で始まる端唄「並木駒形」で、その場の空気が一気に落ち着きどころを得た。

小舟に乗つて吉原へと向かう途上の地名を提示されることにより、観客は会のテーマとなる江戸を、そして遊里を想起する。続く小唄「辰巳よいとこ」では、直前に唄われた吉原芸者の向こうを張つた辰巳芸者の出で立ちが唄われ、一曲目の地名の提示を継承しつつ、今度は遊里に暮らす女たちのイメージが徐々に立ち現れる……。

開演前まで諸処に浮遊していた客席の意識はこのとき既

にひとつ道筋を与えられ、いま目の前で紡ぎ出されつつある「江戸夕儂嘶」の世界へといつの間にか誘われていた。

続く小唄「一日を」、小唄「お園」では、土地という現象から、浄瑠璃の流れを汲む新内の小唄「夢の柳橋」へ。ここで再び江戸の花街へと舞台がダイナミックに切り返される。

そして今度は雪の中を女のもとに通う男心をテーマとした端唄「我がもの」、ラストは端唄から派生した情緒的かつ技巧的なスタイルの楽曲＝歌沢の「身はひとつ」で終演……。

具象と抽象、男と女、端唄／小唄／新内／歌沢といったスタイル、ありとあらゆる情報が縦糸・横糸として重層的に編集され、ひとつの立体的な時空間が構築されていく。

普段の稽古では日々、唄と三味線の「間」と格闘しているわけだが、ひとつ曲の中だけでなく、演目と演目の境にも「間」は存在する。さらには舞台上に上がる者からすれば、観客の気分との距離感も重要な「間」と言えるだろう。そうした無数の「間」をどんな演目と曲順でデザインするのか？ 師匠の選曲には常に注目なのである。

二月六日、金華山お城下の『鮎料理かわらや』で、江戸小唄の会を覗かせていただきました。「何でお前が江戸小唄なんだ？」ですよねえ……。

祭好きで神輿フリークのボクに十五年くらい前、松岡正剛さんが、「石原君、木遣唄もいいけど小唄、いいですよ」「はあ？」「僕の友だちの西松布咏さんを紹介しますね」で、着物姿の魔女と遭遇しちゃつた！

あん時、感染してたんですね、きっと…。でも、若かつたのか潜伏期間が長くて、すぐには発症しなかった。

その後、柳ヶ瀬のワインバーで、勝新太郎のCD聴いて、「なんかカツコイイなあ…」「いいでしょ、粹よねえ…」このママの一言、中高年には殺し文句ですよ。

以前から、危ないなあって思つてた建築系の、それこそ嘘のかたまりに手足つけたような、剽輕な先輩が小唄やって、発表会に冷やかしに行つてた程度だつたのに。

それが、去年あたりから「最近、小唄習い始めたんやで」「石原君、西松さんって言う師匠知つとるか？」身边には殺し文句にやられたゾンビがうろうろ…。

とうとう粹艶会の唄い初めに呼び出されちゃつたつて訳。出でこれん？」

鬼が島へ行く桃太郎のつもりで帯に尺扇をぐつと挿し、かわらやの階段を上ると、障子から染み出るような三味線の音…。「デンジャラズゾーン！」

下手から、そおーっと潜り込むと、六曲一双の前には芸ちゃんが…。

あれ聞かしゃんせ あの端唄
聞くにつけても思い出す…

普段とは違つて神妙な顔。小唄端唄の背景には物語があるて、その主人公になりきつて唄ううし。

鮎洲の海晏寺は紅葉の名所で、奈良や京都にも負けてない歌詞だけど、実は艶比べじやないのかなあ…。

「色の品川 情けの鮎洲」つてくらいだし。どうもいけない、

粹な男になりたくて

石原 忠光



すぐそつちに反れちゃうんですね。

座敷に上がるとすぐ羽織を脱ぎたがる凡夫には、
紫の羽織の紐の結び目の…

こんな怖ろしいシユールな人生觀には、ついてけません
よ。酔っ払って殴った殴られたなんて話じやないですから。

そもそも、布咏師匠の一寸さびのある声で朗々と唄われる
と、やたら艶っぽくなつて、あぶない世界を覗いちゃうんです。

縁でこそあれ 未かけて 約束かため 落ちついた
大事な男は 他所の花 女心に 口説かれて

切るに 切られぬ 此糸が 義理ゆえ細る 仇名草
志んさんの 唐茄子屋政談、思い出しちやつた。
野暮は揉まれ

て粹になるとか
言いますが、花
魁を知る由もない半可通の分際
は揉まれなくつ
ていいんです。

茶の湯という
ワクチンの助け
を借りて、南瓜
売りのゾンビにな
らないよう腐
心している此の
頃でござります。

唐茄子屋 あー…



計画停電に想う

並木 隆史

平成二十三年度薦くらぶ幕開け興行を西松布咏さんにお願いしました。旧暦の正月に「正月を寿ぐ」というつもりで二月一日にしたのですが、よく調べたら今年の正月は二月三日、つまり二月二日は大晦日でした。しかしながらそ

こは布咏さん、晦日に因んだ曲を織り交ぜつつ「春風がそのままよと 福は内へとこの宿へ 鬼は外へと梅が香添ゆる」と、時を節分へと移していただき、主宰者の失態を上手くフォローして下さいました。感謝。

この災害は多方面にわたり大きな影響をもたらし、便利で贅沢な生活に慣れた今の日本人には当分不自由を感じるかもしれません、それでも先の大戦での空襲や原爆投下を受けての敗戦時の状況を考えれば、まだまだ余裕のある生活です。日本人の底力を以てすれば十年から二十年で十分復興できるのではないでしょうか。しかしながら計画停電や余震のあおりでイベントや公演がどんどん中止になつているのは残念です。節電するなど工夫すればなんとかなるはずなのに。こんな時こそ活発に活動し、どんどんお金を回さないと経済が停滞します。人々の心が委縮するのも心配です。東電の電気供給量が減つても、駅構内、パチンコ屋、コンビニなど必要に明るかつたり、エアコン掛け過ぎの施設が多かつたりするので、節電できる余裕は十分あります。劇場も夏はひざ掛けが必要なくらい冷やしていく体調を崩さないよう注意する程です。これからは節電のため、少しは快適な劇場になるものと逆に期待すらしています。薄着で団扇を持参し、その白扇を止めるような芸の力を見せてもらいましょう。伝統芸能は電気がない環境の中で育まってきたのですから、本来の形で演じていただけの良い機会ではないでしょうか。

頑張つて歌舞伎興行を続ける松竹は節電の一環で照明を落とすそうですが、「今まで明る過ぎてハーレーション起こすぐらいだったので却つて良い舞台になる」と岡崎制作部長。

能も暗い所では白い能面が引立ち、縫い箔もその効果が發揮されます。「明治時代中期に興福寺の薪能が復活された時、電燈一つ下げるのも憚かられた」と能楽師の安田登さん（日本人の心と体を元氣にする注目の異才）。この際、形式だけはない本物の薪能や蠟燭能を観たいですね。神を喜ばし豊作を祈る芸能である相撲は街頭募金も結構

ですがむしろ境内などで復興支援の勧進相撲をやつてはどうでしょう。八百長騒ぎで世間を騒がせたお詫びもかねて「昔は屋外でやつていたので天候に左右されることを計算して一ヶ月の余裕を持つて十日興行をやつていた」と元力士一ノ矢さん（「お相撲さんの『腰割りミトレーニングに隠されたすごい秘密』実業之日本社でブレーク）。

日本人に見る「思いやりと覚悟と」

軍司 達男

月明かりを愛で、蠟燭の揺らぎに身を浸し、布咏さんの三味線と唄に耳を傾ける。寒ければ火鉢に手をかざし、鉄瓶でお燐をして一杯やる。考えるだけでわくわくしませんか。当代の勘三郎が話していましたが、芸妓さんがお酌をするときにはしなだれかかるようにするのは暗いので手元をよく見るためだそうです。妙齢なご婦人にお酌をしてもらい、何とも言えぬ香しさに胸をときめかす。節電に託けてこんな贅沢な時を過ごせないものかと。

皆さん、日本の素晴らしい伝統文化を楽しむ絶好の機会が到来しました。豊かな気持ちになつて少しづつ着実に困難を乗り切つて行こうではではありませんか。

（平成二十三年三月二十七日、谷崎潤一郎「陰翳礼讃」を読み返しつつ）

東日本大震災から一ヶ月近くたつた四月九日。都内赤坂のお座敷を借りきつて行われた「美紗の会のつどい」に客として出席させて頂きました。西松布咏さんは、NHK時代からかれこれ二十年近くのお付き合いですが、門外漢



の私は何度も発表会に招かれて少しづつですが、日本の伝統芸能の奥の深さを垣間見てきました。

「美紗の会」のお弟子さんたち三十人ほどが披露する江戸情緒たっぷりの小唄、端唄、新内小唄の数々。唄のタイトルからして、「桜見よと」、「春霞」、「隅田の月」、「おぼろ夜」などといった季節をめぐる人情ものから、「やらずの雨」、「身はひとつ」、「待ちわびて」などの男女の思いを唄つたものまで、伝統芸能に込められている日本人の懐かしい情感を味わいました。

例年だと、花見の季節に見合った華やかな発表会だそうですが、今年は大震災後の何となく落ち着かない不安な気持ちの中の発表会。唄の最中に「やらずの雨」、「身はひとつ」となりました。それでも、お師匠さんによれば誰ひとり、こういう時期だから会をやめようと言つ声は出なかつたそうです。

◆ 懇親会でのいい話

さて、会が終わつての懇親会。参加した人々がそれぞれに立つて今日の思いを話す機会がありました。皆さんのお話を聞きつつ、私は「ああ、いい話を聞かせて貰つているなあ」と感じ入りました。

殆どの方が、自分の芸のことばかりでなく、今回の地震で被災した人々への思いを話していました。こういう時に自分が日本の伝統芸能やる意味を皆さん考えておられました。「3・1・1を経て自分は、亡くなつた人々への思いを込めたい」と言う方が、「もっと生活の足元を見つめて、その上に大事な文化というものを考えたい」と言う方。「私などはもういつ死んでもいいと思つてゐるけど、毎日自分がやるべきことをしつかり見つめて行きたい」という方。そして、会の最後に見事な踊りを披露された花柳千寿文さんが「私はいまも初心を忘れずに踊つています」「いつも初心で考えればまだまだこれからだという思いになるのです」の言葉に私は復興を目指す被災地へのエールのように聞こえました。

◆ 3・1・1以後の日本人のこころ

一見、伝統芸能の発表会と今回の大震災とは無縁の世界のように思われるかも知れませんが、こういう話を聞きたながら、私は今日多くの多くの人が一つの思いが芽生えていると

いうことを感じました。

一つは、被災地の人々への思いです。多くの人々が被災地の人々との思いを共有しながら、被災地の人々の気持ちに寄り添うように日々を生きているということです。

そしてもう一つは原発事故に対する不安と、ある種の覚悟です。原発事故の行方は心配で不安ですが、一方で芸事への精進に見られるように、自分を見つめながら、むしろこれまで以上に日々の生活をしっかりと送つていく。そういう覚悟のようなものを感じます。

3・1・1以後、私たち日本人の心の中には、「被災地への人々へのおもいやりとある種の覚悟」とが芽生えつつあるのではないか。「美紗の会」の皆さんのお話に感動しつつ、励まされるような思いを抱きながら帰途につきました。

《今後の公演予定》

● 平成二十三年七月十六日(土)

午後一時半開場 三時開演

神田明神 祭務所ホール

江戸唄と落語を楽しむⅡ

江戸夏粧賑噺(えどのはなつきなにぎわい)

唄と三味線 西松布咏

落語 春風亭正朝

● 平成二十三年八月七日(日)

午後三時開演

岐阜・今町 カわらや大広間

第八回 粋艶会のついで

粋艶会一門浴衣会と親睦のタベ

■ たより第69号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保朋子
デザイナー 近藤幹則

美紗の会

主宰 西松布咏

稽古場 港区白金台二一一二
白金台プレイス三階

電話 (三四四一)一七一六
(五四四七)一一四一二

E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misa5

